

◆病院の理念◆

社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに良識ある人間性豊かな医療人を育成します。

新年のご挨拶

病院長 内山 和久



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては、よき新春をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。

昨年春には大阪薬科大学と法人合併し、今後、診療、教育、研究面で新たな展開が期待されます。

一方、群馬大学不祥事事件などから、厚労省の通達により昨年10月から「医療安全推進部」の「医療安全対策室」に専任医師が配属されることとなりました。さらに、安全対策室と並列して、新しく「医療管理室」が設置され、専従の医師を配置して医師のDPC教育とともに医療の質の向上を図ることになりました。また大学病院への自浄作用を目的とした「内部通報窓口」設置の義務化など、医療安全部門を中心とした管理体制が強化されました。

昨年3月には増加傾向をたどる手術症例に対応できるように病院西側に6階建ての中央手術棟が竣工しました。2、3階に計20室の手術室と16床のICU、そして4階には胸部外科病棟、5階には消化器外科病棟が配置されました。手術室にはハイブリッド手術室や内視鏡外科手術室、ロボット手術室など最新設備が施され、多施設の見学者からの数々のご称賛を頂戴しました。

本年からいよいよ具体的な新病棟建設計画がスタートします。2年かけて病棟青写真を描いた後に、今の5号館と隣接する臨床講堂棟を1年かけて解体してから、2年かけて12階の北病棟が建設されます。つまり5年後にはメインのタワー病棟が建設され、6階建ての南病棟（外来棟）、6号館を改築した管理棟などすべてが整備されるのはほぼ10年先、つまり大阪医科大学創立100周年を迎える頃となります。

われわれ職員一同は、今後とも日々丸となって高度先進医療を推進するとともに、患者さまとご家族に安心と安らぎを与えられる病院を目指しますので、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

連携を大切に
信頼に応える
看護を目指して

看護部長 西山 裕子



謹んで新年のお慶びを申し上げます。

本年は干支では酉年。正確には十干と十二支で「甲（きのえ）と子（ね）で甲子（きのえね）」で音読みにすると「こうし」、甲子園球場はこの年にできたのでこの名前が付けられたと記録にございます。また干支の順でいうなら、猿と犬の間に入って仲を取り持つ「親切で世話好き」とも言われています。この年が穏やかで良き1年でありますよう、心よりご祈念申し上げます。

さてすでに皆さまご承知の通り、わが国の高齢化は急速に進展しており、これまでどの国も経験したことのない超高齢化社会を迎えております。現在の老年人口割合は予想をはるかに超えて23%となっており、この数値は高槻市を含む三島医療圏においても同様となっております。このため病気の構造も慢性疾患中心型になるとともに、高齢者を中心に要介護者の大幅な増加がもたらされ、国民負担や公費負担の限界をめぐり、医療経済の状況も年々厳しくなっております。この対策として「地域包括医療ケアシステム」が策定され、従来の病院完結型から、医療・ケアと生活が一体化した地域完結型へとすでに転換が図られてきております。

本院は医療に関わる次世代を育成しつつ高度医療を提供する「特定機能病院」として、日夜努力しております。厚生労働省の医療施策に基づき「特定機能病院」は、「かかりつけ医」と役割分担を明確に協力し合って、高度先進医療を含むより高度な専門医療を必要とする患者さまや、病気が進行中の急性期の患者さまを看ることを役割としています。速やかに適切な医療看護を提供し、入院の継続により生活の質が損なわれ、損なわれた生活の質がさらに症状の改善を阻害し、その人らしさを失ってしまうことがないように、人生の豊かさを享受していただけるように、早期から退院後の生活や環境調整する役割を重視して参りたいと存じます。「健康科学クリニック」「訪問看護ステーション」「三島南病院」と末病から在宅、療養から看取りまで組織体制を整えておりますが、地域中核病院として顔の見える関係を大切に、地域の各機関、各施設との連携をさらに強化して参りたいと存じます。

地域で支えるキーパーソンとなり「適切なケアを提供でき、多職種とともに必要なサービスや地域をつなぎ、患者さまの生活を支えること」を目指し、寄り添う心を大切にして信頼に応える看護サービスを提供すべく、職員一同真摯に努める所存でございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

大阪医科大学附属病院のボランティア活動

大阪医科大学附属病院のボランティア活動は平成20年11月に1名の初診案内ボランティア活動から始まり、今年で8年が経ちました。本院ボランティアは、患者さまの立場に立った活動を通して地域に開かれた病院の実現を目指すというボランティアポリシーのもと、人と人が向き合った患者さま志向の「ヒューマンサービス」を行っています。ボランティア支援室は、ボランティアと地域社会をつなぐ拠点となり、ボランティアを受け入れ、活動の場を提供できるよう取り組んでいます。

病院ボランティアは、平成28年2月に活動の主体性のある組織をめざし、ボランティアグループ「ふれあい」として正式に発足しました。現在、活動者数56名で11種類のボランティア活動を展開しています。写真の他にも、園芸・植栽、エコキャップの仕分け、小児科病棟でのイベント、入院患者さまへの行事食用の折り紙などの活動があります。ボランティアに興味のある方の参加をお待ちしております。

お気軽に下記までお問い合わせください。

ボランティア支援室：
(072)684-7230(直通)
E-mail:volunty@osaka-med.ac.jp

室長 花岡伸治

「ふれあい」ボランティア活動のご紹介



初診案内・患者誘導
初めて来院される患者さまへの声かけや案内など、病院玄関回りのチームの一員として、活動しています。



患者さま図書
外来へお越しの方や入院の方が図書をご利用いただけるように寄贈図書による活動を院内25カ所で行っています。



車椅子の空気圧定期点検
患者さまが不便なく快適に院内移動できるように病棟の車椅子の空気圧点検を行っています。



縫製
病院や患者さまのニーズに沿えるように手作り品を製作しています。



季節の飾り
折り紙飾りを通し、患者さまの日常性や楽しみをつくりだしています。

市民公開講座

平成28年9月17日開催

南海トラフ巨大地震を控えて、
今、私たちが取り組んでいること
—超急性期から、復興期まで—

救急医学教室

富岡 正雄



段ボールベッドの展示・説明中(市民公開講座にて)

1995年の阪神淡路大震災において十分な医療活動が行えなかった教訓から、地域で災害医療の中核となる災害拠点病院が整備されました。本院は三島圏域の災害拠点病院です。またDMAT（ディーマツト）という災害派遣チームも育成され、発災直後からの超急性期の医療を担うようになりました。

2011年の東日本大震災では、このDMATが全国から集まり活動しました。しかし災害の規模があまりにも大きく、急性期以降の活動に教訓を残したので、現在さまざまな団体が被災地どのように医療支援を行うか取り組んでいるところです。

それは、近い将来起こると言われている南海トラフ巨大地震において、いままで経験したことのないような被害が起こることが予想されているからです。特に人口が多い大阪府では130万人の方が発災1カ月後も避難生活を送ると想定され、その間に寝たきりになったり体調を崩される高齢者や体の不自由な方がたくさんおられるでしょう。しかも病院も被災しており十分な治療が行えなくなるでしょう。

そのため、発災直後からリハビリなどの支援チームが早期から避難所に行き、寝たきりにならないように体操をしたり、段ボールで作ったベッドを導入して動きやすくしたり、トイレの数と質を向上させ感染が拡大しないように支援しています。DMATに比べ、まだまだ周知はされていませんが、とても重要な支援活動です。「備えあれば憂いなし」「予防に勝る治療なし」です。

平成28年11月19日開催

最近まぶたが重くて開きにくくありませんか？
眼瞼下垂のお話

形成外科学教室

岡田 雅



最近、テレビでも特集が組まれる「眼瞼下垂」。聞いたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。難しそうな言葉ですが、「まぶたが開けにくい状態」のことです。

この状態の原因はたくさんありますが、頻度として圧倒的に多いのが「加齢に伴うまぶたが開けにくい状態」つまり、専門用語で言いますと「退行性眼瞼下垂」という状態です。ではなぜ、年を取ると「眼瞼下垂」が生じるのでしょうか。まぶたが開くには、眼瞼挙筋という筋肉を使います。しかし、加齢に伴い、上まぶたとこの筋肉の結合部が引き伸ばされて、筋肉の力がまぶたに伝わらない状態になるからです。

次に、まぶたが開けにくいと本来は眼瞼挙筋という筋肉が頑張らないといけませんが、先ほど述べたとおり、眼瞼挙筋の力が伝わらない状態ですから、まぶたを上げようと額の筋肉（前頭筋）が代わりにいつもがんばっています。このいつも額の筋肉ががんばっている状態が、最近、頭痛や肩こりの原因にも関与していることがわかってきました。

治療は手術によって、離れてしまっている上まぶたと眼瞼挙筋の結合部をつないであげることで。手術の第一目的は「視界を広げる」「昔のように楽に目が開くようになる」ですが、付随して「頭痛」「肩こり」が解消された場合も多く、まさに「生活の質（QOL）」を変えてくれる治療といえます。心あたりのある方は、ぜひこの機に受診をお考えください。

平成28年12月17日開催

治る脳卒中、治す脳卒中
～寝たきりにならないために～

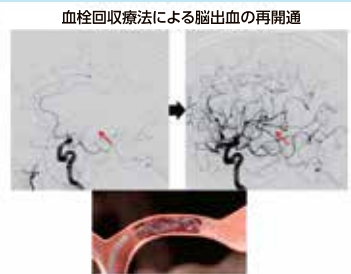
脳神経外科学教室

宮地 茂



脳卒中は突然やってきます。1秒前まで普通の人だったのが、次の瞬間には意識がなくなり、体が動かなくなってしまいます。「卒中」は「突然中（あた）る」ということですが、まさにいきなりやってくる体の異変です。でも心臓やお腹の病気と違って、いったん「中る」と、後遺症で人の世話にならなければならない体になってしまうのが重大な問題ですね。寝たきりになる大きな要因は、やはり脳の衰えや病気によるものです。しかし最近では「中って」しまっても、すぐに治療すれば、脳がダメになる前に元に戻すことが可能になってきました。脳梗塞になりかかったところで、詰まっていた血管を再開通させて脳を救う方法、いったん動かなくなった手足を積極的に動かして復活させる方法、画期的な薬などもでてきました。

でもやっぱり脳卒中にはなりたくないですから、その前に予防することが一番です。死亡率5割という最も恐ろしい脳卒中であるクモ膜下出血は、脳動脈瘤の破裂で起こります。最近では脳ドックで見つかることも多くなっています。小さいうちは放置でもよいのですが、大きいものや症状が出てきた場合には、根治的な治療をしておくことが勧められます。昨年からはさらに治療成績を上げる新しい画期的な方法もでてきました。さらに、脳卒中の大部分を占める脳梗塞を起こす脳血管の閉塞を、そうなる前に治しておくことも安全にできるようになってきました。これらの未然に予防する治療法についてもご紹介しました。寝たきりにならないためにどうしたらよいか、皆さんで考えましょう。



血栓回収療法による脳出血の再開通



パイプラインを用いた脳動脈瘤の閉塞

開催のご案内

三島医療圏がん診療連携拠点病院 合同
第1回市民公開セミナー

テーマ：もっと知ろうよ！がんのこと

開催日：平成29年1月21日（土）午後2時～4時30分頃

場所：大阪医科大学 看護学部講堂

- プログラム：
- I 「がん診療に対する社会医療法人仙養会北摂総合病院の取り組み」
 - II 「大腸がん検診の実際」
社会医療法人仙養会北摂総合病院
副院長補佐、がん診療推進室室長、消化器内科部長 佐野村誠
 - III 「がん診療に対する大阪医科大学附属病院の取り組み」
大阪医科大学附属病院 がんセンター長、脳神経科・脳血管内治療科科長 黒岩敏彦
 - IV 「胃がん手術の最前線」
大阪医科大学附属病院 一般・消化器・小児外科 李 相雄
 - V 「がん診療に対する社会医療法人愛仁会高槻病院の取り組み」
社会医療法人愛仁会高槻病院
副院長、がん診療センター長、消化器外科部長 土師誠二
 - VI 「新しい肺がん治療」
社会医療法人愛仁会高槻病院
副院長、がん診療センター副センター長、呼吸器内科部長 船田泰弘
 - VII 「がん診療に対する日本赤十字社高槻赤十字病院の取り組み」
日本赤十字社赤十字病院副院長、呼吸器外科 千葉 渉
 - IV 「診断時からの緩和ケアについて」
日本赤十字社高槻赤十字病院 緩和ケア科部長 木元道雄

【1階・2階フロア】 各がん診療連携拠点病院のブースを設置しております。

詳細は、院内のポスター・チラシをご覧ください

開催のご案内

大阪医科大学附属病院 がんセンター
第4回市民公開セミナー

テーマ：みんなで学ぼうがん医療『肺がん』

開催日：平成29年2月18日（土）午後2時～4時30分

場所：大阪医科大学 新講義実習棟 P101

- プログラム：
- I 「健診／人間ドックにおける肺がんのスクリーニング」
健康科学クリニック 副所長 福田 彰
 - II 「肺がんの病理診断」
病理部・病理診断科 医長／専門教授 岡田仁克
 - III 「原発性肺がんに対する外科治療」
呼吸器外科 科長／診療准教授 花岡伸治
 - IV 「肺がん治療における放射線治療のさまざまな役割」
放射線治療科 吉川信彦
 - V 「分子標的治療・がん免疫療法の最前線」
呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科 科長／診療准教授 藤阪保仁

詳細は、院内のポスター・チラシをご覧ください

看護スペシャリスト
専門看護師・認定看護師の活動

Part 9



その人の残された能力を
最大限に引き出せるような
関わりを大切にしています。

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師
松本 由香

脳卒中とは、脳の血管が詰まったり、破れたりすることで突然に発症する病気のことをいいます。脳卒中には、脳の血管が詰まることによって起こる脳梗塞と、脳の血管が破れることによって起こる脳出血、脳の血管にできた瘤（こぶ）が破れることによって起こるくも膜下出血があります。一昔前は、脳卒中は命を落とす病気として知られていましたが、医療の発展や、質の良い薬の開発によって、脳卒中によって命を落とすことは減ってきています。しかしながら、脳卒中になると、運動障害や言語障害などの後遺症を残すことも少なくありません。脳卒中リハビリテーション看護認定看護師には、今までできていたことが突然できなくなるとい戸惑いや不安を感じておられる患者さまに対し、精神的サポートだけではなく、後遺症をもちながらも安心して生活していけるようにサポートしていくという役割があります。日々の看護ケアのなかに“リハビリテーション”の視点を持ち、その人の残された能力を最大限に引き出せるような関わりを大切にしています。これからは脳卒中の後遺症による生活の困難さが少しでも軽減されるよう、医師、看護師、リハビリセラピストなど多職種と協働し、最良の医療・看護を提供していきたいと思います。

情報コーナー

院内コンサート

平成28年10月22日（土）午後2時から、大阪医科大学附属病院外来ホールにおいて、毎年恒例の「院内コンサート」が行われました。

本学学生で編成の「大阪医科大学室内管弦楽部」「グリークラブ」の奥行ある演奏に続き、星賀専門教授のピアノ演奏、浮村専門教授の男性二重唱、そして花房名誉教授のバイオリンの音色が披露されました。最後は、会場内の皆さまで「ふるさと」を大合唱しました。

